

2024年05月28日(火)【外為Lab】松田哲

タイトル:【相場の格言、逆相場の可とする】

2024年4月29日(月曜日)は、祝日「昭和の日」で東京外国為替市場は休場。

そういった状況下で、2024年4月29日(月曜日)の日本時間の午前中に、ドル/円は160円台前半に上昇した。

ところが、この日(2024年4月29日)の日本時間午後に、ドル/円は155円台に大きく急落した。

155円台から、いったん157円台に急上昇したが、そこ(157円台)から、再度大きく急落し、安値を更新して155円を割り込み、154円台を付けた。

この日(2024年4月29日)の夕方、財務省の神田財務官は、「為替介入の有無については、ノーコメント」と述べている。

※後日の報道を見ると、5兆円規模の介入が実施された可能性が高い。

+++++

今月(2024年4月30日、5月1日)のFOMCでは、政策金利据え置きを決定した。

6会合連続での政策金利据え置き。

インフレについて、再び懸念していることを示唆し、利下げを開始するには、物価上昇ペースが鈍化していることを示すさらなる証拠が必要とした。

+++++

5月1日のFOMCでの政策金利据え置き発表後、30分ほど経過すると、再び、「為替介入」が実施された模様。

ドル/円は、再度、大きく急落した。

この時の安値は、151円台後半を付けた。

+++++

+++++

上記2回の「為替介入」の結果、ドル/円は、高値が160.00アラウンド、安値が152.00アラウンドの大きなボックス相場（持ち合い相場）を形成中、と言って良い、と考えます。

++++  
++++

ボックス相場（持ち合い相場）の格言に、以下のものがあります。

「相場持ち合いとなれば、同数の取り合いなり。逆向かいを可とする」

まず、この格言の意味を考察しましょう。

「持ち合い相場」が続くと、市場参加者の考えが、ブル・ベア均衡するようになります。

ブル派（相場が上がると考えている人たち）は、価格が上昇すると、さらに買う行動に出ます。

思っていた通りの、いかにも強い相場つきに見えるので、買いで付いていきたくなるのです。

しかし、そこは逆向かって、売ってもいいですよ。

ベア派（相場が下落すると考えている人たち）は、価格が下がると、「ほれ、見たことか」といわんばかりに売ります。

しかし、そこは逆向かって、買ってもいいですよ。

この格言は、そういった意味です。

++++

通常の相場では、「逆張り」は、あまり推奨されないのですが、この格言では、「逆張り」を「可」としています。

それは何故でしょうか？

相場の動きは、結果として「持ち合い相場」と気が付くのであり、いつ何時、持ち合い相場を放れるのかは、誰にもわからないことです。

別な言い方をすれば、「この相場はまだ、持ち合い相場が続くのだ」と、自ら判断した場合にのみ通用する格言なのです。

相場の格言は正しいことが多いのですが、まず、前提条件がそろわないと当てはまりません。

ですから、この格言は「逆向かいを可とする」という表現をしています。

「やりたければ、そのようにやってもいいですよ」  
といったニュアンスなのです。

言外に、「やらなくてもいい」「場合によっては、いつ何時、相場が放れるかわからないから、やらない方がいい」といった意味合いが含まれているのです。

「このようなときには、このように対応しなさい」という強いニュアンスの場合には、「逆向かいをするべし」とか、「逆向かうべし」といった表現になるはずです。

+++++

「膠着（こうちやく）相場」というか、「ボックス相場」というか、そのような値動きをしているときにも、利益を追求しなければならない場合のアドバイス（格言）だと思います。

+++++

しかし、「逆向かいを可とする」相場で、実際に「逆張りオペレーション」を行った場合には、最後に、どちらかに放れるところで、必ず「損切り（負け）」になります。

ですから、「逆張り」で何往復とれるのかが、損益の分かれ目になります。

オプション・プレイヤーがストライク・プライスを中心に、売買を繰り返すオペレーション（リボルビング・オペレーション）をよくやっていますが、その技法も、この格言にのっとったものです。

+++++

+++++

（2024年05月28日東京時間13:40記述）